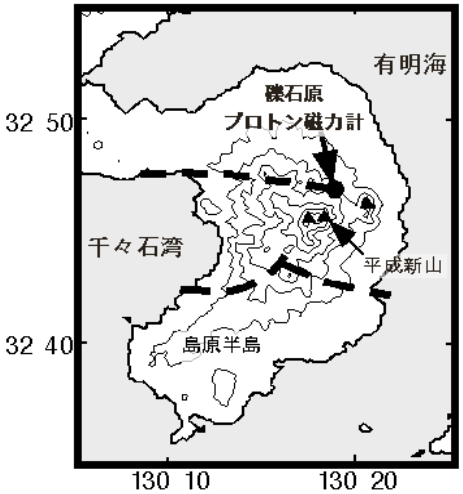
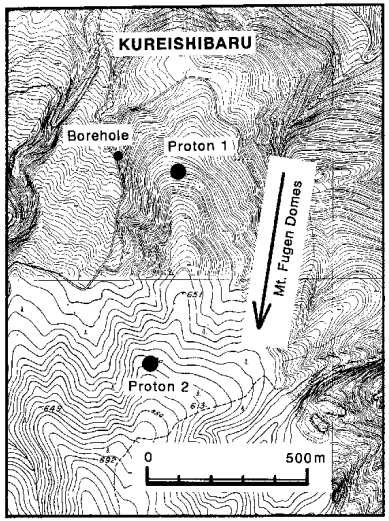
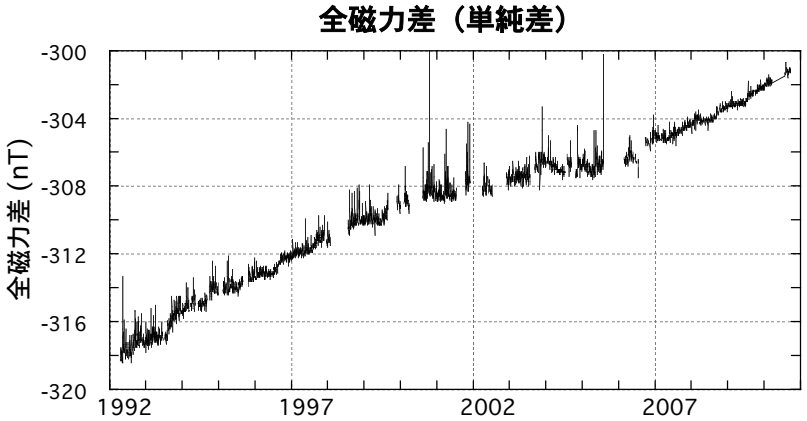
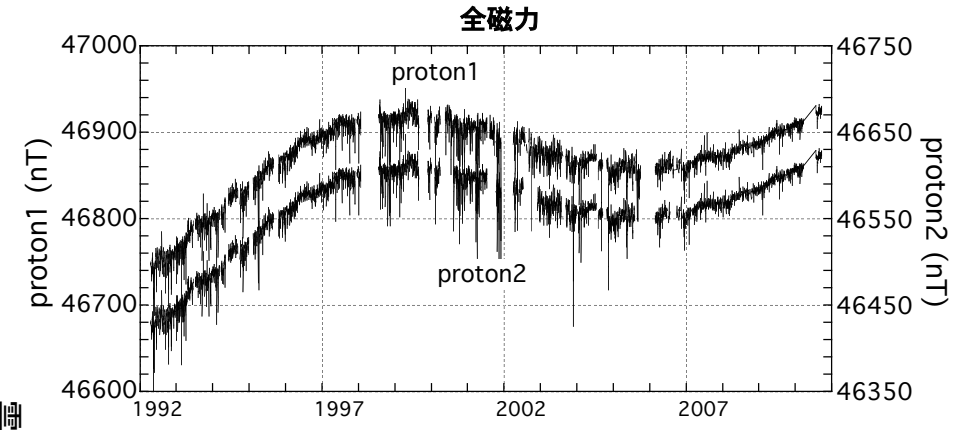
雲仙岳北麓における全磁力変化

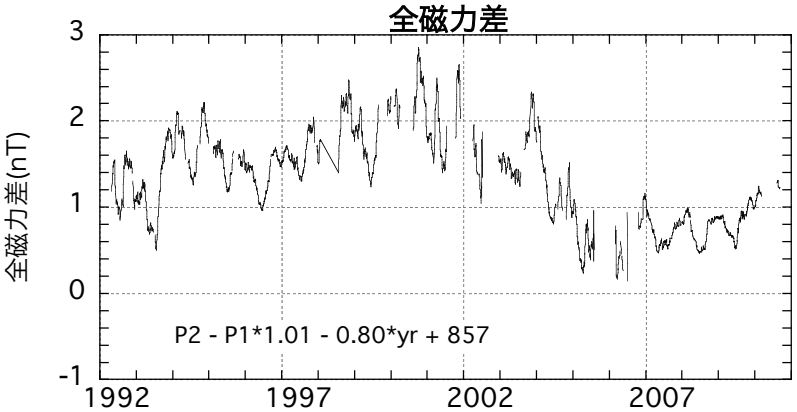






単純差では約0.8nT/yrの増加傾向が見られる．さらに両地点には1度05分の伏角の違いがあり，最近の九州地方の地磁気永年変化の影響を受けている．





全磁力を30日間の移動平均値を用いて，ばらつきが最小になるように係数を決めて差を求めた．また0.8nT/yrの経年変化を差し引いた．2000年ごろより全磁力差が減少し，帯磁傾向が見える

九州大学地震火山観測研究センター